

フランソワ・モーリヤック研究
——『テレーズ・デスケルー』に現れた《神》——

中 島 公 子

Une Étude sur François Mauriac

— «Dieu» dans “Thérèse Desqueyroux” —

NAKAJIMA Kôko

«Dieu» paraît absent dans “Thérèse Desqueyroux”, bien que l’auteur soit reconnu comme romancier catholique représentatif de ce siècle. L’écrivain peint toujours un monde de la «Misère de l’homme sans Dieu» dont les paysages sont exclusivement humains. Aucun être surhumain n’y existe en apparence. “Thérèse” n’en est pas une exception. Mais dans ce pays appelé «une extrémité du monde», «Dieu» est-il vraiment absent?

En fait, avec prudence, l’auteur cache la présence de «Dieu» derrière des détails variés. Les sacrements, pénitence et eucharistie, et le jeune curé impuissant et souffrant, peuvent représenter «Dieu» dans la pensée de l’héroïne. Et on peut remarquer que l’«Être» — le mot préféré par l’écrivain pour désigner Dieu — signifie d’une part «la présence de Dieu dans l’âme», et d’autre part un être comme une personne qui pourrait aimer Thérèse et être aimé par elle.

Mais l’événement le plus dramatique de l’apparition silencieuse de Dieu dans ce roman, c’est la mort de la tante Clara qui arrête brusquement la tentative de suicide de sa nièce. Thérèse avait appelé Dieu à l’aide avant l’acte, et supplié : «Qu’il détourne la main criminelle». Et le corps de Clara «s’est couché sous ses pas au moment où elle allait se jeter dans la mort». C’est évidemment Dieu, pour le romancier, qui a exaucé sa prière.

Mais Thérèse méconnaît cette «Volonté». Elle a peur de l’«Être» comme si le taureau avait peur du torero. Elle assimile à l’arène le chœur ou le prêtre dit la Messe, et elle appelle ce chœur «l’espace vide», ce qui reflète son attitude «en guerre ouverte» contre Dieu.

En dépit de son obstination, l’auteur ne renonce pas au salut de l’héroïne. Dans la préface de ce roman, il dit: «Du moins, sur ce trottoir où je t’abandonne, j’ai l’espérance que tu n’es pas seule.» Cela veut dire que Thérèse n’est pas abandonnée seule dans sa solitude, c’est l’«Être» qui l’accompagne. Concluons donc à la présence de Dieu, malgré son absence apparente, et disons : «Dieu est omniprésent, mais au lecteur de le trouver.»

《特別研究》

フランソワ・モーリヤック研究

——『テレーズ・デスケルー』に現れた《神》——

中 島 公 子

まえがきにかえて

昨1998年7月31日から2日間、下関マリン・ホテルにおいて日本キリスト教文学会九州支部の夏季セミナーが行われた。遠藤周作研究がその主要テーマであったが、私は学会主催者の依頼を受け、その第1日目の夕べの時間を借りて、「『テレーズ・デスケルー』の遠藤訳に現れた《神》」と題する研究発表を行った。「神なき人間の悲惨」を陰画として描くことによって20世紀の無神論的風土における《神》の存在証明を果たす——もし「カトリック作家」という名称の定義をこのように言い表すことが可能だとすれば、フランソワ・モーリヤックも遠藤周作もともにこの目的のために情熱を燃やした「カトリック作家」の代表であり、遠藤はモーリヤックの代表作『テレーズ・デスケルー』の翻訳者としても著名であるから、遠藤の「テレーズ」訳を検討することによって、この両者における《神》概念の異同、さらには小説技法上の違いといったことまで、探ることが可能ではないか、と考えたための一種実験的試みであった。その結果は本年（1999年）7月発行の同学会機関誌『キリスト教文学』第18号⁽¹⁾に掲載を許されているが、最初依頼によって出発したこの作業が、モーリヤック研究の1ステップとして、思いのほか収穫の多いものであったことに私自身驚いている。すなわち、遠藤訳を検討する前に、『テレーズ・デスケルー』という小説にどのような形で《神》が登場しているか、を、まず原文の“Thérèse Desqueyroux”によって調べ直した結果、この作家の《神》概念および小説におけるその表現がきわめて個性的であり、特徴的であることがあきらかになってきたからである。下関におけるテーマは遠藤にウェイトのかかったものであったため、この特徴をモーリヤックに即して検証することには限界があった。今回の報告はこれを作品の原文に当たって考察しなおしてみたものである。今回はそれだけにとどまるが、引き続き、「テレーズ」とならぶ彼の代表作『蝮のからみあい“Le Nœud de Vipères”（1932）』に《神》がどのように現れているか、どのように表されているかを考察し、「テレーズ」とあわせて「モーリヤックの小説に現れた《神》」の特徴を明らかにしたいと考えている。これによって作家自身の心の深奥にある《神》のイメージおよびそれを言語化するにあたっての方法があきらかになれば、それは取りも直さずこの作家の創造の秘密の一端に触れることになるのではなかろうか、と思われるからである。

一見モーリヤックの小説はたとえばドストエフスキーのように、《神》を直接の主要なテーマとするものではない。しかし、小説家としての自分を定義して「具体的ななかで働く形而上者」⁽²⁾といったのもモーリヤック自身である。それは、この作家の作品のすべてに、《神》が隠れて存在していることを意味する。パスカルのいう「神なき人間の悲惨」とは、自他ともに許す彼の小説世界を要約する言葉とされているが、「神なき」ということ自体が裏返せば《神》の存在証明なのである。1952年11月、ノーベル文学賞を受賞した折に、“*Le Figaro littéraire*”に発表した“*Vue sur mes romans*（私の小説についての見解）”のなかで、モーリヤック自身この《神》を「恩寵」と呼び、自分の小説のなかで罪に汚れたたとえばテレーズ・デスケルーのような主人公を作者がどのように裁こうとしても（描こうとしても）、たえず「目には見えないが常に現存する恩寵による反撃を受ける」と述べ、この「恩寵」こそ自分の小説の理解の鍵であると言っている。またこの「恩寵」の故に自分の小説はある人々を引き付けある人々を遠ざけることにもなる、それはテクニクの問題だとも言い、さらに加えて、自分の小説を覆う「大気」は無神論者の作家にとっては「呼吸し難いもの」であろう、とも言いきっているのである⁽³⁾。

つまり、モーリヤックの場合《神》はそれとはっきり名指しで登場するのではなく——いやもちろん名指しで書かれていることもあるが——多くの場合「恩寵」の働きかけの形をとって現れる、ということである。「恩寵」は目に見えない。作中人物にすら分からない場合が多いのだから、読者がそれを《神》と認めようと認めなかりと、それは自由である。しかし、どんなにさりげなく置かれているにしても、作者はそれを十分に意図しているのである。私がここで洗い出してみたかったのは、そうしたカトリック作家モーリヤックの手の内である。“*Thérèse Desqueyroux*”という小説のなかに作者がどのような形で《神》を登場させているかを、この作品のエクリチュールに即して検討することである。

そのために、作中から《神》を指示対象（réfèrent）としている語および語群（フランス語の原文と日本語の訳文の双方にあたるため、「コトバ」と表現する）を選び出し、そこに作者が持たせている意味内容（connotation）を吟味するという方法を取った。ただし語の選択にあたっては、辞書にそのレフェランスが示されているもの以外に、前後の文脈を手掛かりとして私の感覚に訴えるものを取り上げている。その意味では、これはひとつの恣意的な読書方法に過ぎないともいえる。しかし長年この小説に深く付き合ってきた者として、可能な限り作者の意図に沿うことをこころがけたつもりである。

“*Thérèse Desqueyroux*”に現れた《神》

“*Thérèse Desqueyroux*”において、《神》は序文および第一章から第十章までの、主としてテレーズの想念のなかに浮かぶものとして現れる。

まず第八章までは、この女主人公が夫を毒殺しようとして未遂に終わったとされる裁判が、当の夫と主人公の父親の奔走によって「不起訴」に持ち込まれ、放免を言い渡された裁判所から、ランドの

奥地にある別荘へ、過去を回想しながら帰るという設定で小説が進行する。したがって、この部分においては、テレーズの想念といっても、犯行以前のものと以後のものとが混在して示されているが、“神”はそのどちらにも登場している。

第九章で別荘に到着して夫と対面してから、第十章では彼女が自殺をはかるのを叔母のクララの死が未遂に終わらせるという展開があって、《神》はこのテレーズの自殺とクララの死にからんで非常にはっきりとした形で登場する。これ以降の三章は館に幽閉状態となった彼女がパリで放免されるまでを描いているが、ここに《神》は一切登場しなくなる。ただし、物語が終わったあとで書かれた「序」の末尾、パリの路上をひとり歩き始める女主人公に語りかける作者の言葉にふたび《神》は現れている。

全部で9カ所、以下にそのコトバ（原文と稿者による逐語訳）を示す。ページはPléiade版“*Œuvres romanesques et théâtrales complètes*” II (Gallimard 1979)の箇所を示している。

- ① Sois Pardonnée 「赦されてあれ」 P. 27
- ② Va en Paix 「平和のうちに行きなさい」 P. 28
- ③ un Dieu 「神」 P. 52
- ④ Être infini 「無限の存在」 P. 55
- ⑤ cette chose étrange 「あの変なもの」 P. 70
- ⑥ cet Être 「その存在」 P. 84
- ⑦ une volonté particulière 「なにか特別な意志」 P. 85
- ⑧ cet espace vide 「そのうつろな空間」 P. 85
- ⑨ ... j'ai l'espérance que tu n'es pas seule. 「おまえが孤独ではないという希望を私はいたく」
P. 17

①と②は、第二章、「不起訴」を言い渡されたテレーズが法廷からアルジュルーズの館へ向かう帰り道、やがて対面することになる夫ベルナルに心のうちを告白して赦しを乞おうとする、その想念のうちに浮かぶベルナルの言葉として出てくる。このベルナルは実際の人物とは打って変わった理解力と温情にみちた人物としてイメージされているが、それに加えて、この二つの言葉によってわかることは、テレーズの告白がカトリックの秘跡の一つである「告解」になぞらえられていることである。したがって想像のベルナルはこの告白を聞くことによって神の赦しを取り次ぐ司祭の役割をになっていることになる。この二つの言葉は「告解」に際して司祭が発する言葉だからである。①は十字を切って赦しをあたえるとき、②は秘跡の終了を告げるときに用いられる。これらの言葉を使うことによって、作者はテレーズが自分の犯行を「罪」と認めていること、そして罪を赦すことのできるのは《神》のみであるという認識が彼女のなかにあること、さらに、それと意識せずに主人公が《神》を求めていることをも示している。これがこの小説における最初の《神》の登場である。

③は第五章の末尾、回想される過去のなかで、愛していない夫の子を宿したことに悩むテレーズが、「胎内の生命が日の目を見ないようにしてくれる神があるなら、そんな神と巡り会いたかった」という文章のなかに出てくる un Dieu という言葉である。原作はここでもっとも一般的、通俗的《神》概念を示す Dieu という言葉を用いることによって、罪を犯す前のテレーズが、そうした一般的通俗的な概念しか《神》にたいしてもっていなかったことを示している。この名称は小説中唯一この箇所にはしか使われていない。小説の進行にともなってこの名称が他のコトバに取って代わられて行く。テレーズの内面における《神》概念の変化、「神の変容」がこれによって示される。その変容のいわば布石として、作者はまずこの Dieu という語によって神を登場させているのである。

④は第六章、クララというテレーズの叔母についての説明の箇所に出てくる。

ここからは論旨を明らかにするため、前後必要と思われる文章の和訳（稿者による）と原文を載せて行くことにする。

「じつのところ（と、テレーズは思う）ラ・トラヴ家の人々にくらべたらクララはその誰よりも信仰心があるのだけれど、自分を耳の聞こえない醜女にし、愛されることも男の腕に抱かれることもなく死んで行かせようとしている無限の存在⁴⁾に対して、公然と戦いを挑んでいるのだと。」

... au fond (songeait Thérèse), plus croyante qu'aucun La Trave, mais en guerre ouverte contre l'Être infini qui avait permis qu'elle fût sourde et laide, qu'elle mourût sans avoir jamais été aimée ni possédée.

《無限の存在》すなわち《神》が l'Être infini である。

以上の文章はクララのテレーズによる解説といったものであるが、この耳の聞こえない老嬢クララという人物は小説の中ではテレーズの分身（アルテル・エゴ）であり、作者はこの人物を通して、人間にも神にも心を通わせることのできないテレーズの孤独を表現しようとしているので、ここに現れた《神》概念は犯行以前のテレーズ自身がもっていたそれと重なるもの、テレーズ自身の抱いていたものと取ってもよいのである。

大文字の Être「存在」は『出エジプト記』⁴⁾に起源をもつ《キリスト教神》の代名詞としてはかなり一般的な名称といえる。infini「無限の」にも格別の意味はなく、神であることを明確にするためのものと取ってよい。神を除いて「存在」はすべて有限だからである。Dieu との違いを強いてさぐれば、Dieu は異教の神をも含むが Être infini はキリスト教世界の用語だということはできる。クララ（テレーズ）の意識のなかには、「無限の（能力をもつ）存在であるならわれわれの不幸を許さないこともできるはずではないか」という抗議の感情がこめられている。またラ・トラヴ家に代表されるフェリサイ的カトリック教徒が無反省に口にする「神の慈愛の広大無辺さ」への皮肉も読み取るべきである。ただし、もうひとつこの用語には重大な役割がある。それはのちにテレーズにおける

《神》概念が変化するとき、神に対して用いられるのがこの大文字の Être であることである。この変化についてはのちに述べるが、その「変容」を可能にするために作者がこの語をとくに選んでさりげなくここで使っていることに注意したい。

⑤は第八章、犯行以前のテレーズが《神》の实在を肌で感じ取る重要なエピソード、「聖体の祝日」の出来事のなかに出てくる。

聖体の祝日 (la Fête-Dieu) とはパンの形態のもとに現存するキリストすなわち聖体 (Hostie) を祝う祝日で、六月の初旬に行われる。この日、金製の顕示台に入れた聖体を捧持する司祭につづいて信徒が列を作り、道々、この秘跡をもって十字架の犠牲を再現するキリストへの感謝の祈りを唱えながら歩く「聖体行列」と称する行事が行われるのが常である。土砂降りの雨のなか、信徒たちも家の扉を閉ざして出て来もしない路上で、この行事を行っている若い司祭が捧持する「聖体」を、窓から眺めながらテレーズが「奇妙なもの」la chose étrange と呼んでいるのである。

「テレーズはまじまじと司祭を見詰めた。両手でその奇妙なものを持って、ほとんど眼を閉じたまま歩を進めている。唇が動いている。あんな苦しげな様子をして誰に話しかけているのだろう？ と、すぐ、そのあとに『義務を果たしている』ベルナルの姿が見えた。」

Thérèse dévisagea le curé, qui avançait les yeux presque fermés, portant des deux mains cette chose étrange. Ses lèvres remuaient : à qui parlait-il avec cet air de douleur? Et tout de suite, derrière lui, Bernard «qui accomplissait son devoir».

ここに出てくる司祭はモーリヤックの好んで描く人物典型で、説教も下手だし、指導性にも欠け、教区の信徒たちに日頃から軽侮されている人物である。だがここでテレーズは、単に義務感からしぼしぼ行列にしたがっているベルナルではなく——「この日ほど夫を不快に感じたことはない」とテレーズは回想する——人々に忌避され、見捨てられている司祭とその「奇妙なもの」との間にある不思議な関係に注目し、引き付けられているのである。la chose étrange はテレーズの反カトリック的意識を表すと同時に、にもかかわらずなぜか彼女の意識に引っ掛かってくる、この「もの」に対する一種の「異物感」をよく表している。

ある大気、ある熱が司祭と「もの」とを包んでいる。その「もの」は、苦しげに震える司祭の唇が問いかける誰ともしれぬ相手そのものでもある。そこには余人のはいりこむ余地のない、日常性の次元を越えたある対話が成り立っているかのようにみえる。少なくともこの司祭にとって、その「もの」は語りかける司祭の心を読み取り、答を示すことの可能な何かなのだ。人との間、神との間すべてにおける「交流途絶」に悩んでいたテレーズはこの不思議な対話に引き付けられていたのである。

同じ箇所、街角から人影が消えている有り様を作者は「まるで子羊ではなく獅子を往来に放したかのように」と表現している。「子羊」はあきらかにキリストすなわちこの場合「聖体」をあらわす

比喩として常套的なものであるが、加うるに「獅子」といっているのは、それが何かしら危険な、触れれば火傷をしそうなものであることを暗示している。こうした一種の「おそれ」をもこめて「奇妙なもの」と呼びながら、そこから目を離すことができずにいるテレーズはこのとき作者によって《神》のすぐそばに、手をのばせば届く距離に置かれているのである。

⑥⑦⑧はともに第十章に出てくるものである。

第十章はこの小説のほぼ真ん中に位置し、これを境として回想を中心とした前半が終わり後半が始まる分岐点となる重要な章である。ここでテレーズは《神》に出会う。⑤においてあの司祭と「奇妙なもの」との間に成り立っていたものと同質の「対話」がテレーズと神との間にも成り立つ。《神》は登場人物のひとりとなり、テレーズの運命に荒々しく介入する。したがってこの章における《神》は出来る限り注意深く綿密に考察されなければならない。

⑥ 第一章から始まったテレーズの旅は、馬車、汽車、そしてまた馬車を乗り継いで裁判所のあるB市から目的地である「地の果て」アルジュールズに到達する。その道々告白しようと思っていた相手のベルナルの、①②で期待したのはあまりにかけはなれた冷酷無残な対応にうちのめされ、絶望したテレーズは自ら死をえらぶ。明け方の寒気のなか、震える手を毒杯にのばす彼女の念頭に、⑦の聖体行列のときの司祭の姿がよみがえり、神を信じないテレーズがここで思わず《神》に祈るのである。

「もしそれが、その存在がほんとうにこの世にあるものなら（と言った途端、あの雨に閉ざされた聖体の祝日、金欄の祭服に押し潰されていたあの孤独な男の姿がちらりと彼女の目にうかんだ。両の手に捧げ持っていたあの品物、もぐもぐと動かしていた唇、そしてあの苦しげな様子）、罪を犯そうとするこの手を、手遅れにならないうちに、どうかその方が払いのけてくださいますように。そしてもし盲いたあわれな魂が生死の境を越えることが御旨であるならば、せめてその方に創られたこの鬼畜にも劣る者を、愛の御手に受け止めてくださいますように。」

S'il existe, cet Être (et elle revoit, en un bref instant, la Fête-Dieu accablante, l'homme solitaire écrasé sous une chape d'or, et cette chose qu'il porte des deux mains et ces lèvres qui remuent, et cet air de douleur), qu'il détourne la main criminelle avant que ce ne soit trop tard; — et si c'est sa volonté qu'une pauvre âme aveugle franchisse le passage, puisse-t-Il, du moins, accueillir avec amour ce monstre, sa créature.

下線を施した「その存在」cet Être が問題である。

Être という語については、これがかなり一般的な《神》の代名詞であることは④で触れておいたとおりである。“Petit Robert”をみても次のような説明がある：

◇Relig. Dieu, être éternel, être parfait, être suprême. 《*Adorez l'Être éternel . . . Rien n'existe que par celui qui est*》(Rouss)

ただしここで作者はそのような一般的な意味合いでこの語を用いているわけではない。テレーズの内面で、この大文字の「存在」は内容を変えている。死を前にして語りかける対象、答を求める相手に変貌しているのである。そして Être という語の持つ内容のひろがりがこの変貌—変容を可能ならしめている。

まず文脈に即してこれをみよう。括弧のなかの聖体の祝日の記憶のなかで、Être, homme, chose とこの三語が同格に置かれていることに気づく。homme は人間を、chose は事物を意味するが、人間と事物はこの地上での「存在」の様態としては主要なものといえる。homme も chose も un être なのである。Être, homme, chose とならべていくことによって「神なる存在」はあらゆる「存在するもの」を包括する「存在の源」であることが意識される。それと同時に、この場合《神》が観念的なものから具体的なものへと引き寄せられていくことが感じられる。「もしそれが実在するなら」というとき、テレーズは復活したキリストに対するトマスのように、目で見、手で触れられるような生々しい「存在」を心に描いている。次いで祈りにはいると Être は II「その方^{かた}」と言い直される。つまり「彼」である。その「彼」は、毒杯を彼女から取り上げたり、愛情をこめて彼女（の魂）を抱きとったりすることのできるきわめて人間的な存在となっているのである。

次にこの作家の文体的特徴の面から、モーリヤックは小文字の être に関して独自の用法を持つ作家であることに注目したい。

これを指摘したのは、構造主義言語学の代表的存在 Georges Mounin（ジョルジュ・ムーナン）である。1974年刊行の“*La Linguistique*” 1 n°10 pp21-32においてムーナンは、《Structure, fonction, pertinence. A propos de *Thérèse Desqueyroux*.》と題する論文のなかでこの小文字の être について次の事柄を指摘している。

「この語は常にテレーズが愛したいと願うような人物を思い浮かべている箇所に出現し、これによって愛する対象からセックスへの指向をまったく排除している。」⁽⁵⁾

さらに être に続いてセクシュアルなニュアンスを避けて恋愛の対象としたい人物を表現する語として、

corps, créature, quelqu'un

をあげている。

最後にあがっている quelqu'un については別の小説⁽⁶⁾においてまさにムーナンの指摘するとおりの用法に稿者自身気づいていたが、être についてはこの語が「ひと」を意味するあまりにも一般的な

ものであるため（先に参考に供した“*Petit Robert*”もこれを筆頭にあげている）この特徴にはこれまで気づかなかった。しかし指摘されてみればこの小説中、être は頻繁に登場しており（ムーナンによれば33箇所）、次のような典型的な例もある。後半アルジュルーズに幽閉の身となったテレーズの空想のなかに浮かぶ架空の人物である。

「ある(1)ひとが彼女の生活のなかにいて、そのためにはかの連中はまったく詰まらなく見えてしまう。仲間のだれもが知らない(2)ひと。ごくおとなしい、目立たない(3)ひとだけれど、テレーズの日常のすべては彼女の目にだけ見えるこの太陽のまわりをまわり、彼女のからだだけがこの太陽の暖かみを知っているのだ。」⁽⁷⁾

下線を施した「ひと」の原語は(1) être (2) quelqu'un (3) créature である。なおちなみに下線をほどこした「からだ」は corps である。

ごく一般に「ひと」を意味する être がテレーズのなかでは彼女が恋愛の対象としたいと願う人物にかかわる文脈中に用いられている。このことから、大文字の Être の場合も単に無色透明な《神》の概念を表すより、テレーズの思い、感情を受けとめる具体性を帯びた存在者としてイメージされていると推論することも不可能ではないと思う。

稿者が日頃参考にすることの多い辞書に“*Dictionnaire de la Foi Chrétienne*” (*Les Éditions du Cerf*, 1968) がある。その中で Être は「魂のなかの神の現存」(Présence de Dieu dans l'âme) を意味する場合があるとされている。解説としては「神にとって、その偏在による現存にとどまらず、主体性のあるものとして意識的に認識され、親密な感情をこめて知られ、愛される対象という新たな性格を帯びて人間の魂のうちに存在すること」⁽⁸⁾と述べられている。

これを⑥の場合にあてはめれば、テレーズにとっての Être は、彼女の魂のなかにその存在の感じられる、そして彼女のをうけとめ、彼女に愛を注ぐことの可能な《神》を意味する。クララと同様に無神論者であるはずのテレーズが死を前にして己が運命、生か死かの選択をゆだねた《神》はこのような《神》なのである。

⑦に移る前に重要なことを指摘しなくてはならない。本稿はもともと遠藤周作の翻訳を吟味することを目的とした論稿をもととして論旨を展開している。そのため、《神》を指示対象 (référent) とする語（単語および語群）を作中から抜き出して論じている。ところが、ここ、すなわち⑥と⑦の間に位置する文のなかに、《神》は、それを指示するコトバぬきでいきなり姿をあらわすのである。

それは言い換えれば、①以下すべての箇所においてテレーズの想念のうちに現れていた《神》が、テレーズを飛び越えてみずからの意志で作中にその存在を示す、と言ってもよい。ただしその存在は目に見えない。モーセがシナイ山で見た「燃える薪」はここには存在しないのである。

このような出現の仕方は全小説中ここだけであり、それを《神》の登場とみなすか否かについての指標となるべきコトバも差し当たっては存在しない。したがってこれを《神》と取るのは稿者の恣意

であると言われるかもしれない。が、そうではないのだ。⑥におけるテレーズの祈りを祈りと認めるなら、それに続く一連の出来事を《神》の介入と認めないわけにはいかないのである。作者は《神》を指向するコトバをひとつも使わずにここに神を出現せしめている。むしろテレーズの祈りはこの《神》、モーリヤックの言葉を使うなら「《恩寵》の反撃」を引き出すための装置の役割を果たしているといえる。

祈りは間髪をいれずに聞き届けられた。「あの存在」は「罪を犯そうとする（自殺しようとする）その手をはらいのけ」たのである。

テレーズが祈りをつぶやき終わるか終わらないうちに、家のなかが騒々しくなって、女中のバリヨンがかけこんできた。テレーズにはショールをテーブルのコップの上に掛ける暇があったにすぎない。「クララ様がおなくなりになりました。もう冷たくなっておいでです」とバリヨンが言う。クララの死がテレーズの命を救い、自殺の試みは未遂に終わった。これが《神》の答であり、《神》によるテレーズの運命への荒々しい介入の顛末である。両者は相見え、テレーズと《神》との間には対話が成立したのである。

しかし、遠くから進んできた直線が一瞬の交差ののちにそのままそれぞれの道をたどるのにも似て、テレーズと《神》は顔を合わせた途端、またしても遠く隔たったところへ行ってしまう。そのことを表すのが⑦である。

⑦は葬式の前、クララの遺骸を眺めるテレーズの胸のうちを叙した文中に現れている。

「この遺骸、この老いた忠実なからだをテレーズは眺める。それは自分が死の中に飛び込もうとしたまさにその瞬間、足元に横たわったのだった。偶然だ、偶然の一致だ。もしだれかがなにか特別な意志といったことを口にしたら、彼女は肩をすくめたにちがいない。」

Thérèse regarde ce corps, ce vieux corps fidèle qui s'est couché sous ses pas au moment où elle allait se jeter dans la mort. Hasard; coïncidence. Si on lui parlait d'une volonté particulière, elle hausserait les épaules.

une volonté particurière「なにか特別な意志」。この「意志」volonté という語に注目しなくてはならない。

テレーズの祈りのなかにも、“... si c'est sa volonté ... 「もしそれが御旨であるなら」と、《神》の「意志」を問う文言がある。とすると、死のうとするテレーズの足元にクララの死体を横たえたのはあきらかに《神》の意志なのである。先に、クララの死による《神》の介入は神がみずからの意志でその存在を示したものであると言ったのは、このためであり、テレーズの祈りがこうした《神》の行為を引き出す役割を果たしたと言ったのもこの故である。volonté はこの場合《神》を引き出す装置として機能している。だから不定冠詞をつけてばかりした表現を取っているにもかかわらずこれは

《神の意志》を意味し、ここでテレーズがみずから求めたはずの《神》の返答をそれと認めずに否定していることがあきらかになるのである。

しかし否定するとは言っても、そこには以前すなわち第九章までのテレーズとは微妙な違いがある。かつてのテレーズには、「もしほんとうにそれがあるなら」という言い方に窺われる神の《存在》にたいする疑いがあった。今回はクララの死が自分を死から救ったことは認めながらそれを《神》の業とはしたくないのである。つまり《神》と自分との関係の否定であって、《神》そのものの存在の否定ではないと言うこともできる。ちょうど④においてクララが《神》に向かって取っていた態度にそれは近い。つまりクララは「信仰心はある（神の存在は認めている）」のだが、その《神》がクララに不幸な人生を強いたことへの怨恨から「公然と戦いを挑んでいる」のだ。テレーズもここであえて自分の運命にたいする《神》の干渉を拒むことによって、神との間にシャッターをおろし、その彼方には目を向けまいとする。そうした態度をさらに明確に表すのが、これに続く次の文章である。

「テレーズは心のなかでもうこの世にいないひとに向かって話しかける：生きて行きますわ。でもわたしを憎むひとたちの掌中にある屍のような生を。その向こうは何も見ないようにして。」

Thérèse parle dans son cœur à celle qui n'est plus là: vivre, mais comme un cadavre entre les mains de ceux qui la haïssent. N'essayer de rien voir au-delà.

au delà といえばごく普通には「あの世」ということであり、言い換えれば「神の領域」ということになろう。そこに目をつぶって生きるということは、しかし、それが存在しないということではない。実際「もうこの世にいない」クララの居場所はそこなのだから。これ以後小説『テレーズ・デスケルー』に神は一切登場しなくなるが、それはテレーズが交流の通路を遮断し、何を見てもそこに《神》の顕現を見ることはすまいと固く心に決めたからである。そうすることによってこれ以降のテレーズは、隠れた存在に《神》を押し込める。それは一種の宣戦布告である。あえて《神》にでなく、死んだクララに向かってこの表明がなされていることは、これから彼女がクララにならって神に「公然と戦いを挑む」ことを雄弁に物語っているのである。

⑧は第十章の末尾、クララの葬式後はじめての日曜日、教会へ行ったテレーズがミサに参列する場面の描写である。彼女は最前列に席を占める。後ろは群衆、しかし円柱によって彼女の姿は彼らの目から隠されている。右にベルナル、左に姑と三方を囲まれて、正面すなわち「内陣 (le chœur)」だけが目の前に開かれている。「内陣」とはカトリック教会の聖堂正面奥の、祭壇のある場所をいう。司祭がそこでいましもミサを執り行っている。

「まるで暗闇から出てくる牡牛を迎える闘牛場のように、そこだけが、その虚ろな空間だけが、彼女の前に開かれている。そこに、ふたりの子供にはさまれ、仮装を擬らしたひとりの男が腕を少しひ

ろげ、なにか囁きながら立っている。」

Cela seulement lui est ouvert, comme l'arène au taureau qui sort de la nuit: cet espace vide, où, entre deux enfants, un homme déguisé est debout, chuchotant, les bras un peu écartés.

ここに現れているのは⑦よりもさらに強いテレーズの拒否の姿勢である。いま彼女の目の前に展開されているのは、キリストを現世に顕在せしめる儀式そのものであるのに、テレーズはそれを認めない。ただ認めないだけでなく、意識的に拒否している。その拒否の姿勢は闘牛の比喻によってもうかがい知ることができる。三方をふさがれ、そこに出て行くしかない「空間」とは、出て行ったら最後、自分の意志は無視され、神に捕まってしまうというテレーズの恐怖、おびえを映し出している。

その恐怖は、たった一度だけおそろおそろ呼びかけた途端にその答を投げて寄越した「あの存在」に対するものである。彼女は以前のように漠然と神を信じないのではなく、あるとはっきりわかる《神》を恐れ、拒否している。その拒否の頑なさは、あの「聖体の祝日」におけるのと同じ司祭が同じように神に向かって呟きつづける姿から何一つ受け取ることなく、ひややかにこれを「仮装を凝らした男 (un homme déguisé)」と呼んでいることからもうかがわれる。

最も強い、決定的な拒否が現れているのが *cet espace vide* 「その虚ろな空間」である。「内陣」とはカトリック教徒にとっては現世における神の座所そのものである。ここだけがテレーズの前に開かれているというのは、彼女がいやおうなしに《神》と対面させられているということなのだ。クララの死のときと比較してみれば、これは目を閉じ耳をふさぐテレーズに《神》の方が呼びかけているということにもなる。この問題の場所を「空の・空虚な・何もない空間」と呼ぶことによって、テレーズはその呼びかけを全面的に拒否し、そればかりか神の存在そのものを全力をあげて否定しようとしている。

テレーズの目には、神の座所とされるところに神はいない。それだけでなくそこには「何もない」のだ。彼女の語集のなかで《神》が「存在」であったことを思い出そう。「虚ろな空間」というコトバが指示するものは《神》の「非在」にほかならない。神の呼びかけに対するこれ以上強い拒否はない。三方敵に包囲されながらテレーズは敢然と立って神に戦いを挑んでいる。

前に指摘したようにこれ以降《神》はこの小説から姿を消す。それは《神》が存在をやめたからではなく、テレーズが神との間にシャッターをおろしたからであり、「隠れた神」のありように彼女が《神》を押し込めたからである。この「虚ろな空間」なるコトバは非在を強いられた現代の《神》の在り方、言い換えれば「神なき人間の悲惨」を象徴的に示しているといってもよいであろう。

⑨はこの小説の序文に出てくる。繰り返し言うように、《神》は第十章をもってこの小説から姿を消すが、作者は作品ができあがってから書かれた序文のなかで、小説が終わりを迎えた時点でのテレーズに呼びかける形でテレーズと神との関係に言及している。そのため順序を逆にしてこの序文の検討をもって以上の考察を締めくくりたいと思う。

「テレーズよ、苦悩がおまえを神に引き渡してくれるようにと、どんなにかわたしは願ってきた。長い間、おまえが聖女ロクストの名にふさわしくなることを望んでもきた。しかしそうしたら多くの人達が、冒涇だ、と騒ぎ立てただろう。その連中は一方で悩めるわれら人間の魂の墮落とその贖いを信じているはずなのだが。

せめて、おまえを置きざりにするこの舗道に立って、おまえは孤独ではないのだという希望をわたしは持ち続ける。」

J'aurais voulu que la douleur, Thrérèse, te livre à Dieu; et j'ai longtemps désiré que tu fusses digne du nom de sainte Locuste. Mais plusieurs, qui pourtant croient à la chute et au rachat de nos âmes tourmentées, eussent crié au sacrilège.

Du moins, sur ce trottoir où je t'abandonne, j'ai l'espérance que tu n'est pas seule.

Dieu「神」という語をはじめとしてここで作者は真正面からテレーズと《神》との関係を取り上げている。関係とは取りもなおさず罪人テレーズとその救いの可能性ということである。そのことは、無理解な読者のことを「人間の魂の墮落とその贖いを信じる人々」と呼ぶことによってより一層明らかになっている。すなわち作者は、カトリックの根本的教義に則るなら、人類すべてにおよぶキリストによる贖罪と救済の効果がテレーズを除外するものではあり得ないことを、無理解な読者を引き合いにだすことで逆説的に表現しているのである。しかしそれには、つまり彼女が救われるには、テレーズが《神》を見だし、「恩寵」をうけいれなくてはならない。これは、この小説中においては実現しなかった。テレーズは《神》との間に通路を設けることを拒絶し、作者はテレーズをその状態においたまま小説を閉じなければならなかったのである。

とすれば、最後に「孤独でない」テレーズのかたわらにあるべき「存在」とは《神》以外にはあり得ない。《神》が Être「存在」であることを踏まえて作者はこの文を書いている。そしてそれはクララの死以後のテレーズが意識の表層においては《神》を拒否しながら、その深層において《神》とともにあることを暗黙のうちに指し示しているのである。⑥において指摘したとおり Être は「魂のなかにおける神の現存」を意味するものであるから。⁽⁹⁾

最後に l'espérance というコトバに触れておきたい。これは日本語では「希望」としか訳せないが、カトリックの教義においてはパウロが制定した三対神徳 (trois vertus théorogales) のひとつ「望徳」であり、もともとヘブライ語では「信仰」と同義であったと言われるものである。作者がこのコトバをここで用いたということは、テレーズの今後の歩みがいかに《神》と無縁に見えようとも、そこに注がれる「恩寵」を作者が期待し信じ続けることを意味しているのである。

ま と め

以上の考察から引き出されるモーリヤックの小説に現れた《神》の特徴とはどのようなものであ

うか。

まず《隠れた神》ということがあげられる。《神》はただの一度もテレーズのまえに姿を現したことはない。ただ一度あった明らかに神の配慮によるとみられる出来事、すなわちクララの死がテレーズの自殺をとめたことを、テレーズ自身はそれと認めず、偶然と言い切っている。テレーズの見方からすればこの小説に《神》は完全に不在である。主人公自身がそのように認識しているということは、作者が《神》をその状態に置いたことを意味し、読者にもこの小説の中に《神》を見いださない自由を許しているということである。

この小説のもっとも手に入りやすい翻訳（新潮文庫）の訳者である杉捷夫氏はかつて折に触れて、「罪の世界を執拗に描くという以外に、この作家がキリスト教作家であるという特徴を見いだすことができなかったことを告白する」と言われていた。実際、無神論的というより無宗教的風土における日本で、このような反応はむしろ一般的であろう。このことはモーリヤック文学の自律性とその芸術性を実証するものと言うこともできる。彼の作品が見え透いた護教文学と懸け離れたものであることをそれは示しているから。ただしその一方、この小説において作者がいかにみごとに《神》を隠しおおせたかを物語るエピソードであるとも言えるのである。

しかしながら、これまでの考察から引き出される結論は《神》の不在ではなくそのあきらかな実在性である。そしてその《神》を背後に隠した語や語群の特徴をあげようとする、意外にそれらがカトリック教義の正統な《神》概念と一致すること、むしろそれらの概念を深化させ、具体性を帯びさせて表現したものであることがわかる。カトリック教義の重要なキー・ワードを使いながらしかも杉氏のような印象を多くの読者に残し、テレーズの自由を完全に保証した小説作りのみごとさには感嘆のほかないが、日本におけるモーリヤック理解が常に曖昧さを抜け出すことができないで見える一つの理由は、この作家におけるカトリシズムを避けて通ろうとする傾向にあるように思う。ここで《神》を作者がどのようなコトバの背後に隠したかを知るには、モーリヤックの信仰に踏み込まなくてはならないのである。それを承知で以上の考察から明らかになったコトバの特徴を探ってみよう。

その一つは《秘跡 (sacrements)》を用いていることである。①および②は《告解 (pénitence)》を⑦は《聖体 (eucharistie)》を指示している。⑧の「内陣」もキリストが聖体の形色のもとに存在する場所であるから⑦と同様ということが出来る。作者は《神》を主人公の目の前に顕現せしめるために、これらキリストの現世における現存と「恩寵」の働きそのものを意味する秘跡を、それとなくテレーズの思念のなかに滑りこませている。

次にあげられるのは《司祭》すなわち神父の役割である。《秘跡》には司祭がつきものである。司祭は《秘跡》の仲介者であり、その存在自体一つの《秘跡》ということができる。ただしこの小説中に現れた神父はいかにも無力な、弱々しい存在でしかない。が、作者からすれば無力であればこそ《神》の代理をつとめられる存在なのである。そこに重ね合わされるのは無抵抗で十字架についた《受難のキリスト》であり、十字架上で《神》にも見捨てられたことを感じた人間キリストの苦悩である。人間のなかで「恩寵」の媒介を許された者を表現するのに、こうした受難のキリストをイメージさせ

る「苦しむ無力な司祭」の形をとることによって、作者は罪人テレーズと「無限の存在である《神》」との間の距離をいっきに縮めようとしている。

さてそれでは、そのような《神》を作者は何と呼んでいるか。

これについては纒々説明したので繰り返さない。Dieu→Être infini→Être と変貌することによって《神》概念が深化することについても前に述べた通りである。そして⑨においてテレーズのかたわらに常にこの《存在》のあることを確信をもって表現する作者は——これが物語のはじまる前すなわち序文であることを忘れないようにしよう——次のメッセージを我々に伝えようとしていると言えないであろうか：

「この小説中、神はいたるところに存在する。ただしそれと認めるか否かは読者にまかされているのだ」と。

注

- (1) 『キリスト教文学』第十八号 日本キリスト教文学会九州支部発行 1999.7.30. pp. (18)-(40)
- (2) 《Je suis un métaphysicien qui travaille dans le conclet . . .》Grasset 版 “*Œuvres complètes*” XI, Librairie Artheme Fayard, 1952, p. 154
- (3) “L’Herne François Mauriac” Editions de l’Herne, 1985. pp. 167-168
- (4) 『聖書』出エジプト記 3-14
- (5) «Il surgit toujours aux endroits où Thérèse évoque ceux qu’elle aimerait aimer, supprimant ainsi, dans le roman, toute référence au sexe de l’être aimé». Notes sur 《Thérèse Desqueyroux》 Livre de Poche, p. 173
- (6) «...un jour, à un tournant de cette route, *quelqu’un* sera assis dans la bour...» “Les Chemins de la Mer”, 1938. Pléiade 版 “*Œuvres romanesque et théâtrales complètes*” III, p. 666
- (7) «Un être était dans sa vie grâce auquel tout le reste du monde lui paraissait insignifiant; quelqu’un que personne de son cercle ne connaissait; une créature très humble, très obscure; mais toute l’existence de Thérèse tournait autour de ce soleil visible pour son seul regard, et dont sa chair seule connaissait la chaleur.» Pléiade 版 “*Œuvres romanesques.....*,” II, p. 89
- (8) 《Présence de Dieu dans l’âme, le fait pour Dieu d’être dans l’âme, non seulement au titre de sa présence d’immensité, mais au titre nouveau d’objet consciemment reconnu comme sujet, intimement connu et aimé.》*Dictionnaire de la Foi Chrétienne/Les Mots* Les Éditions du CERF, 1968. p. 105
- (9) ちなみにムーナンがあげた *quelqu’un* の大文字表記 “*Quelqu’un*” が《神》をさしている例が《Évangile, selon André Gide》中に見いだされることを指摘しておく。
《*Quelqu’un* le (Gide) suit et il ne Le renie pas.》*Cahiers André Gide* 2, Gallimard, 1971, p. 136

(なかじま・こうこ 農学部教授)